

◆ 今週のコメント

- インフルエンザの定点当たり報告数は、1.93(131例)で、平成21年第53週に定点当たり報告数が10.0を下回ってからも減少し続けています。年齢群別では、「5～9歳」が最も多く、次いで「10～14歳」となっています。第5週に京都市衛生公害研究所でPCR検査を実施した8例のうち、3例からA型インフルエンザウイルスが検出され、そのすべてがAH1pdm(新型)でした(5例は陰性)。
- 感染性胃腸炎の定点当たり報告数は、10.10(414例)で、過去5年平均値(6.06)を上回っており、第1週以降、増加が続いています。年齢階級別では、6歳以下が64.5%(267例)となっています。
- A群溶血性レンサ球菌咽頭炎の定点当たり報告数は、1.07(44例)で、過去5年平均値(0.79)を上回り、平成21年第53週以降増加しています。

◆ 今週のトピックス: <RSウイルス感染症>

定点当たり報告数は、0.66(27例)で、依然として多い状態が続いており、平成21年第51週と並んで、今シーズンで最も多い報告数となっています。

詳細をトピックスに掲載しています。

◆ 発生状況

全数報告の感染症

ありません

定点報告の主な感染症

(市内定点数 インフルエンザ定点68, 小児科定点41, 眼科定点10, 基幹定点1)

定点	感染症名	定点当たり報告数	報告数
インフルエンザ*	インフルエンザ	1.93	131
小児科 (降順5位まで)	① 感染性胃腸炎	10.10	414
	② A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.07	44
	③ 水痘	0.83	34
	④ RSウイルス感染症	0.66	27
	⑤ 流行性耳下腺炎	0.56	23
眼科	流行性角結膜炎	0.30	3

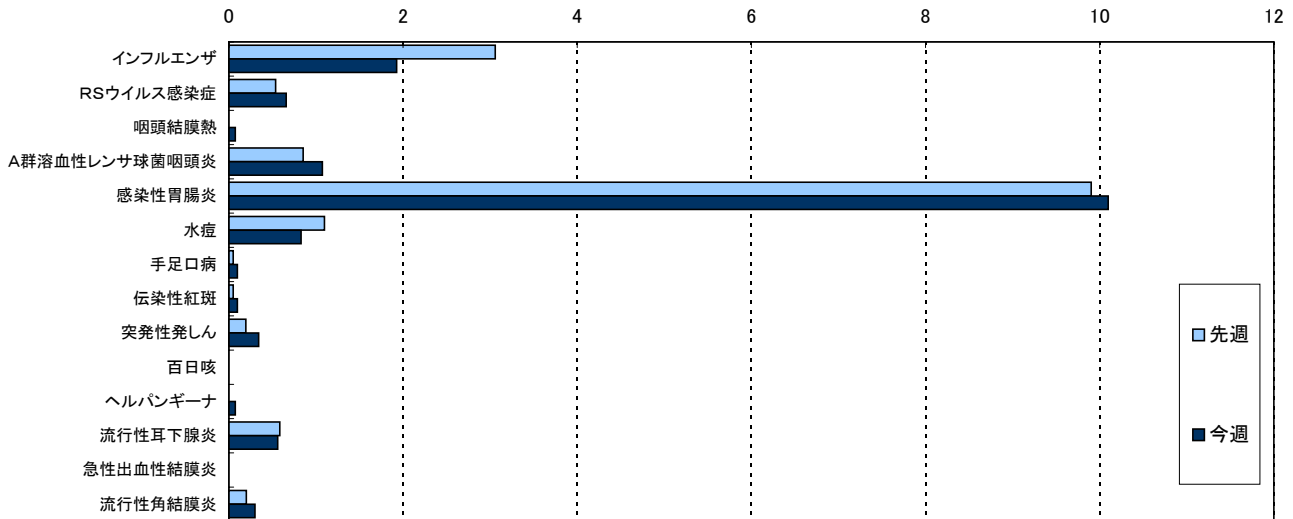
【次ページ以降の主な内容】

発生状況の概況グラフ / 今週のトピックス: <RSウイルス感染症>

(注) 京都市のデータは、平成22年2月12日現在の報告数で、全国の還元データと若干異なる場合があります。
また、本情報での患者数は、届出医療機関所在の保健所での集計で、患者の住所を示すものではありません。
病原体情報は、病原体定点等から京都市衛生公害研究所へ搬入された検体から検出された病原体です。

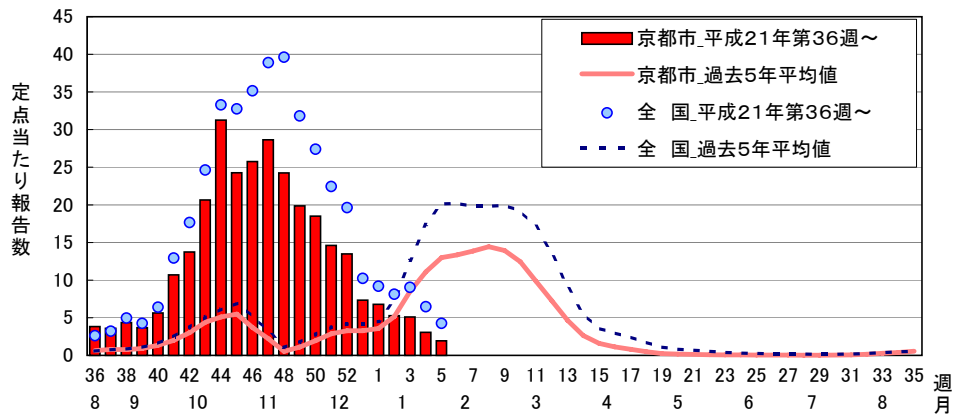
◆ 発生状況の概況グラフ

1 今週(第5週)と先週(第4週)の定点当たり報告数の比較



2 インフルエンザの推移

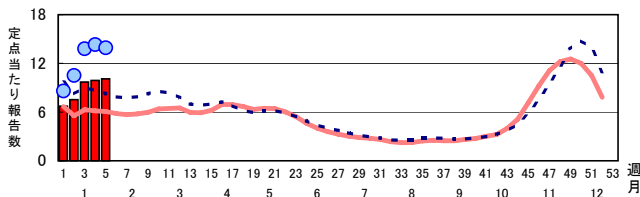
週	報告数(例)
第1週	461
第2週	359
第3週	347
第4週	208
第5週	131
累積報告数 (第36週以降)	20146



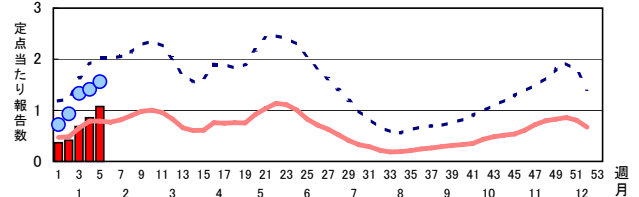
3 主な感染症の定点当たり報告数の推移

<小児科定点>

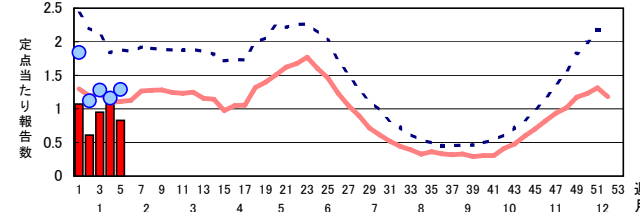
1 感染性胃腸炎



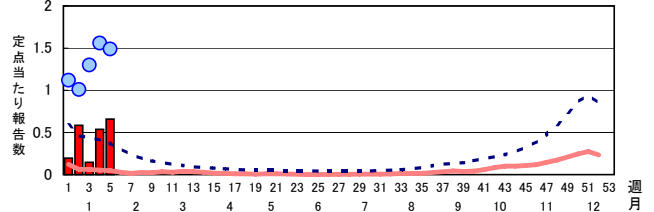
2 A群溶血性レンサ球菌咽頭炎



3 水痘

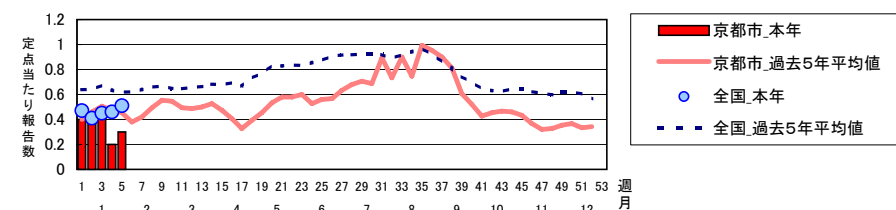


4 RSウイルス感染症



<眼科定点>

流行性角結膜炎



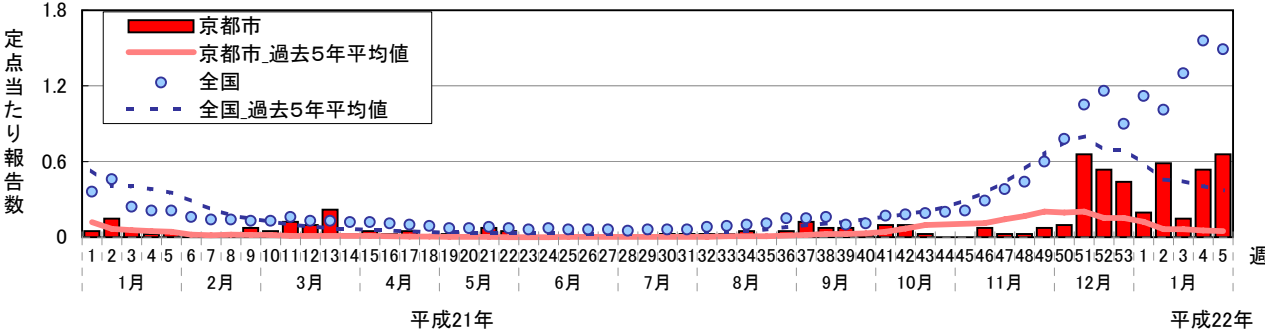
第5週(2月1日～2月7日)トピックス: <RSウイルス感染症>

定点当たり報告数は、0.66(27例)で、依然として多い状態が続いており、平成21年第51週と並んで、今シーズンで最も多い報告数となっています。

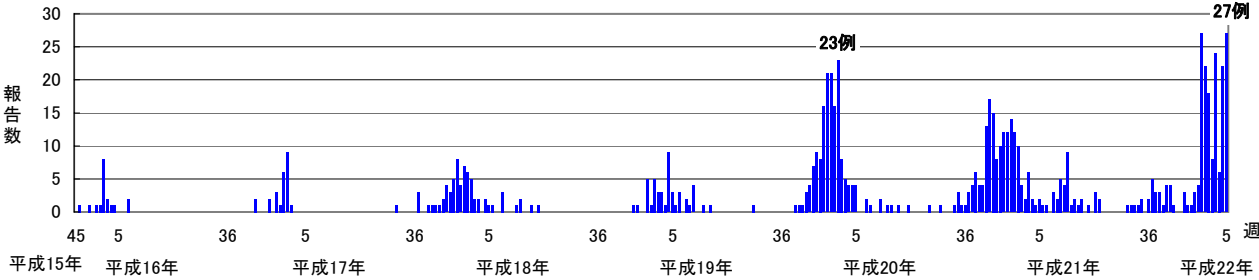
推移をみると、感染症法に基づく届出の対象となった平成15年第45週(11月)以降では、平成20年以降、年報告数が増加しています。また、今シーズンは、1月になっても報告の多い状態が続いています。

年齢階級別定点当たり報告数をみると、1歳が最も多く(7例)、2歳以下で74.1%を占めています。重篤な症状を引き起こしやすい生後6箇月未満の報告数は5例です。

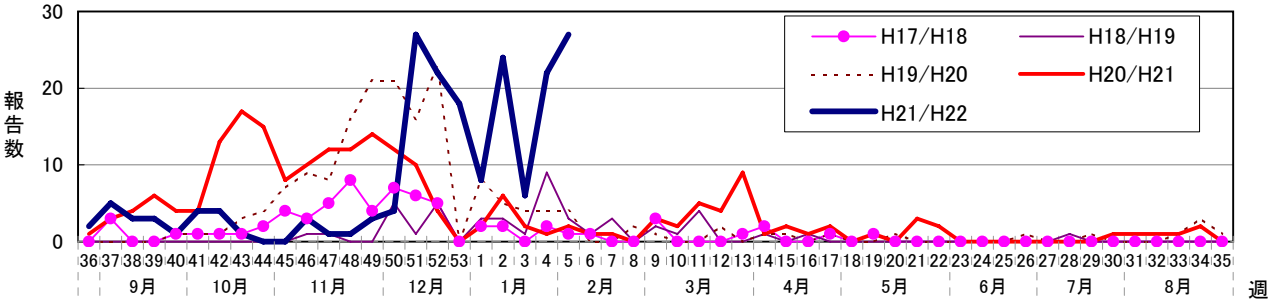
本市及び全国の定点当たり報告数の推移(平成21年～平成22年第5週)



本市の平成15年(第45週)以降の報告数の推移



本市の報告数の推移(5シーズンでの比較)



本市の年齢階級別定点当たり報告数の3週分の推移

